

朱印船貿易時代関連日本史研究および 歴史教科書掲載地図におけるインドネシア部分の表記と場所について

久 礼 克 季

I.

現在の日本における歴史教科書には、朱印船貿易が展開した時代を取り上げる中で、現在のインドネシアにあたる各地域の地名がいくつか見られる。これら教科書の地名は、岩生成一をはじめ20世紀前半以降継続して行われてきた日本の対外交渉史研究の過程で、日本語に翻訳され地図上に比定されてきたものをそのまま利用している。戦前に始まった岩生による対外交渉史研究は、当該の時期ならびに地域の考察において主要な史料となるオランダ語や英語などヨーロッパ言語の文献に現れる地名をローマ字読みないしヨーロッパ言語の発音で日本語にし、その後の多くの研究者による研究もこれを踏襲した。このため、インドネシアの地名にかんしては、現在でも多くの歴史教科書において戦前から続くヨーロッパ言語のローマ字読みや当該言語による読みが使われている。

その一方でインドネシアでは、1949年のインドネシア共和国独立以後、ナショナリズムを背景として、共和国政府が国内の地名についてオランダ語や英語などヨーロッパ語ではなくインドネシア語の呼称を用いている。この状況を踏まえ、日本のインドネシア史研究でも、地名表記において現地語の呼称を用いることが基本となっている。例えば、1999年に出版された東南アジア史の概説書では、インドネシアの地名について全てがインドネシア語の呼称に則したものとなっている¹。

上記のことから、歴史教科書に現れるインドネシアの地名表記とインドネシア史で用いられる地名表記の間には相違が存在するという現状がある。これは日本史教科書や中学歴史教科書だけにとどまらず、一部の世界史教科書でも見られる。加えてインドネシアについては、地名の呼称だけでなく位置の誤りも散見され、さらに当時には存在しなかった場所が掲載されるケースまである。

こうした状況を変えようとする動きは、21世紀に入って以降始まった。日本史では、2003年に行武和博により現地語に則った地名表記を用いた論考が発表される²。またベトナム史では、蓮田隆志が2015年に朱印船貿易や日本町に関連する諸研究における当該地域の地名について呼称や位置の修正を求める論考を出している³。しかしながら、歴史教科書や、その記述において基準となる日本史研究では、現在においても未だに古い呼称や位置の誤りが修正されないものも数多く存在する。

こうした問題を踏まえ本稿では、歴史教科書やこれと密接に関連した日本史研究における

インドネシアの地名について、現在インドネシア史で標準となっている現地語の呼称に則したものに修正を行い、合わせて位置や描写についても修正する。加えてインドネシアと密接に関係するシンガポールやマレーシアの一部についても、インドネシアと同じ作業を行っていききたい。

Ⅱ.

朱印船時代を扱った日本史研究やそれを反映した歴史教科書において、現在のインドネシアに当たる地域やその周辺域を描いた地図は非常に多く存在する。このため本稿では、日本史研究では3点、歴史教科書については4点地図を挙げて検討を行う⁴。

まずは、名前の修正が不要である地名を挙げていきたい。該当する地名は、スマトラ島のジャンビ [図1～3]、パレンバン [図1～3]、ジャワ島のトゥバン [図1～2]、スラバヤ [図1～2]、ボルネオ島／カリマンタン島のサンバス [図1～2]、スカダナ [図3]、バンジャルマシン [図3]、スラウェシ島のマカッサル [図1～4, 6, 7]、スンバワ島のビマ [図3]、マルク諸島のマキアン [図1～2]、バチャン [図1～2] である。

これらの地名は、当該時代となる17世紀オランダ東インド会社〔正式名称は連合東インド会社<Vereenigde Oost Indische Compagnie>、VOCと略されることが多い〕の各文書⁵にそれぞれJambi, Palembang, Toeban, Soerabaja, Sambas, Soekadana, Bandjermassin, Makassar, Bima, Makian, Batjanとして現れる。他方でこれらは、会社がインドネシアやその周辺の海域に参入する以前から現地で使われる現地語の地名であった。こうしたことから当該の各地名は、インドネシア共和国成立以降も現在までそれぞれの呼称で定着し、インドネシア史でもこれらの呼称が使われている。なお、マキアンとバチャンについては、次の段落で示すように島を指す呼び名であることから本来は「島」を付加する必要があるが、インドネシア史では両地については「島」をつけないケースが多いため、地名のみを挙げている。

上記の各地は名前の修正が不要である一方、位置については各図で正誤が異なる。マカッサルとスカダナ、バンジャルマシン、ビマ、マキアン、バチャンは掲載される全ての図で正しい位置にあるが、ジャンビとパレンバンに関しては [図2, 3]、トゥバン、スラバヤは [図2] の位置がそれぞれ正しい。他方、サンバスについては全図とも現在のポンティアナクにあたる位置を指しており、実際には各図の位置から北方に進んだ小さな半島部の付け根当たりの位置に修正する必要がある。

続いて、各図では地名自体は正しいものの島を指す呼称であるため「島」「諸島」を付加する必要があるものを挙げる。

ビントラン島 [図3]、バリ島 [図3]、ブトン島 [図3]、スンバワ島 [図3]、ソロール島 [図1～3]、ハルマヘラ島 [図3]、セラム島 [図3]、バンダ諸島 [図1～2, 4] が該当する。各島のオランダ東インド会社文書における表記は、それぞれBintang, Bali, Buton,

Soembawa, Solor, Halmaheira, Ceram, Bandaである⁶。

これらの位置については、バンダ諸島は〔図1〕、それ以外は〔図3〕の位置で正しい。また、ソロール島の位置は〔図1, 2〕ではフローレス島にある港や土地を指してしまっているため⁷、〔図3〕が正しい。

次に挙げるのは、呼称の変遷や変更により複数地名を併記する必要があるものである。バタヴィア〔図1, 4, 6, 7〕・バタビア〔図2, 3〕とボルネオ〔図1～7〕⁸がこれに該当する。

バタヴィア<Batavia>は、1619年のオランダ東インド会社による当地の占領以降インドネシア共和国成立までこの名前が使われるが、それ以前にはVOC文書等でジャカトラ<Jaccatra>と表され、インドネシア史では現在の呼称であるジャカルタ<Jakarta>も数多く使われている。このため地図上の表記では、対象とする時期によりバタヴィアとジャカトラ・ジャカルタを使い分けるか、対象時期の関係でそれが難しい場合には三者を併記する必要があるのではないかと著者は考える⁹。

オランダ東インド会社文書はじめヨーロッパ文献でBorneoと表されるボルネオは、現在インドネシア領、マレーシア領、独立国のブルネイ王国で構成され、特にマレーシアではボルネオの呼び名が継続して使われている一方、インドネシアでは共和国成立後カリマンタン<Kalimantan>と名称が変更されている。こうした現状と、当該の呼称が島をさすことから、この名前はボルネオ島／カリマンタン島と併記すべきであろう。

位置については、ボルネオ島／カリマンタン島は全ての図が正しく、バタヴィアは〔図1, 2〕の華僑活動地と〔図4〕の場所が正しい場所を示している。

これらに加えて、インドネシアではないがもう1点併記が必要な地名を指摘しておきたい。それは、〔図1, 2〕に現れるインドネシアに近接するシンガポール<Singapore>である。現在のシンガポール共和国の名にも使われるシンガポールは英語の名称で、1819年にこの地をイギリスが占領した後に大きく発展することで広くその名が知られるようになった。だがその一方で、マラッカ海峡周辺の各地域では古くから当該の場所をシンガブラ¹⁰と呼んでおり、VOC文書でも海峡の名称としてSingapoeraと表していた。朱印船時代やそれ以前の名称としてはシンガブラが妥当と考えられる一方、現在はシンガポールの名が各方面で広く認知されてされていることを考えると、当該の場所については、シンガブラ／シンガポールと併記するのが最も適しているのではないかと考えられる。

Ⅲ.

次に、呼称の修正が必要なものを挙げる。該当する地名は、スマトラ島のアチン〔図3〕・アチェ〔図4, 6〕、アンドラギーリー〔図3〕、ジャワ島のバンタム〔図1〕・バンタン〔図2, 3, 7〕・バンテン〔図6〕、グリッシ〔図1, 2〕、カリマンタン島のコタワリンキ〔図

1, 2]・コタワリンギン [図3]・コタワリンギ [図7]、モルッカ諸島 [図1～4, 6]、同諸島のテルテナ [図1]・テルナテ [図2, 7]、チドール [図1, 2, 4]、アンボイナ [図1～4, 6, 7] である。それぞれどう修正すべきかについては、以下の通りとなる。

アチンは、オランダ東インド会社文書ではAtjehやAtchinと表記され¹¹、このうち後者をローマ字読みにしたものがアチンとなる。しかし現在は、[図4, 6] にあり前者を日本語読みにしたのものであるアチェの呼称がインドネシア史だけでなく当地に関連する全ての事柄で完全に定着しているため、これに修正すべきである。

アンドラギーリーはVOC文書ではIndragiriと記載され¹²、それを日本語にしたインドラギリという呼び方が現在定着しているため、この呼称に変えるのが妥当である。

バンタム・バンタンは、オランダ東インド会社文書ではBantamとされ、特に[図1]はこれを日本語にしたものである。だが、当地は現在バンテン<Banten>という呼び方が現地でもインドネシア史においても完全に定着している。こうしたことから、バンタムはバンテンに修正をすべきと著者は考える。

グリッシは、VOC文書でGrisseeとされ、これを一部変化させてローマ字読みしたものが各図で使われていると考えられる¹³。しかしながら、現在この地はグレシク<Gresik>と呼ばれており、インドネシア史でもこの名前が主となっていることから、グレシクと変更した方が良いとみられる¹⁴。

コタワリンキ・コタワリンギン・コタワリンギは、オランダ東インド会社文書ではKotawaringinで、これを正しく日本語にしたものは[図3]のコタワリンギンであり、現在もこの地名が使われている。コタワリンキやコタワリンギはこれを誤植したものと考えられることから、コタワリンギンとすべきだろう。

モルッカ諸島は、VOC文書でMolukkenと書かれるものを日本語に翻訳したものである¹⁵。ただ、現在のインドネシアやインドネシア史では、マルク諸島<Maluku>の呼称が定着している。モルッカ諸島の呼び名は日本史研究や歴史教科書では定着しており、[図5]のように高校世界史教科書でも使われているが、こうした状況を考えればマルク諸島に変えた方が良いと思われる。

テルテナ・テルナテは、VOC文書にTernateとあり、これを日本語にした後者が現在も使われている。前者はコタワリンキなどと同様完全な誤植であり、この点を考慮するとこの地名はテルナテにすべきである。なお、テルナテは島であるため本来はテルナテ島とすべきであるが、インドネシア史では当地について「島」をつけないケースが大多数であるため、地名のみとした。

チドールはオランダ東インド会社文書でTidoreと書かれており、オランダ語やインドネシア語・マレー語とも読み方はティドレーで、これが現在まで現地やインドネシア史で使われている。どのような経緯でチドールと呼ぶようになったかはわからないが、当該時代の史料と現在の読みが一致していることを考えれば、ティドレーとするのが妥当である。なおティ

ドーレも島であるが、テルナテと同様に「島」をつけないケースがほとんどであるため、こちらについても地名のみとする。

VOC文書のAmboinaを日本語読みにしたアンボイナは、現在のインドネシアやインドネシア史ではアンボン<Ambon>と呼ばれている。日本人が巻き込まれた有名なアンボイナ事件が発生した場所であることから日本史研究や歴史教科書では根強く残り、世界史教科書にも数多く掲載されるアンボイナであるが、現地語との整合性を考えるとアンボンにした方が良いのではないか。

ここまで挙げてきた各地の位置をみると、アチェ、インドラギリ、テルナテ、ティドーレ、アンボンについては全ての図が正しく、バンテンは〔図1, 2〕の「華僑活動地」の印と〔図7〕、グレシク、コタワリンギンに関しては〔図2〕の位置がそれぞれ正当な場所となる。

Ⅳ.

Ⅲ. で述べたものに加えて、さらに大幅な修正が必要となる地名も存在する。セレベス〔図1～4, 7〕、ボルネオ島／カリマンタン島に近接するゲラム〔図2〕、チモール〔図2, 3〕、スマトラ島のトゥルクブトゥン〔図1, 2〕である。

セレベスには、2点修正すべきところが存在する。まずは、〔図1, 3〕に現れる島全体を指す呼称について指摘したい。オランダ東インド会社文書においてCelebesと記されるセレベスは、他のヨーロッパの文書にも表れ、日本でも戦前期に当地への移民が多く存在したことを背景にこの呼び方が長く使われてきた。だが、現在インドネシアでこの島はスラウェシ<Sulawesi>と呼ばれ、日本でもインドネシア史だけでなく同島に関する全ての事項においてこの名称を使うのが通例となっている。こうした状況やこの名称が島全体を指すことを考慮すれば、セレベスはスラウェシ島とするのが適当と考えられる。加えて、セレベスについてはもう1点重大な誤りが存在する。〔図1, 2〕には、同島の西部に港市・町の名前としてセレベスが現れる¹⁶。しかしながら、VOC文書や20世紀初めに出版された『オランダ領東インド百科事典』¹⁷の項目など、現在に至るまで各文献や地図において「セレベス」という名の港市ないし町が存在する記録は、管見の限り見当たらない。該当する地図で港市・町としてのセレベスがあるとされる場所の近くには、パル<Palu>とドンガラ<Donggala>が存在する。だが『オランダ領東インド百科事典』では、前者について陸上と海上双方からの風が非常に強く寄港地には向かないとしている¹⁸。その一方で同事典は、後者を両者が位置するパル湾で最も良い港であるとし、1914年にはこの島で最も多く船舶を集めたとする¹⁹。しかし、管見の限り17世紀オランダ東インド会社文書にはドンガラの名はなく、この時期を扱う研究でも当地が港市としての重要性があったとの言及はない。朱印船貿易が盛んであった17世紀前半の東西貿易が香辛料の獲得を目的としていたことを考慮すると、当時はシナ海やマラッカ海峡方面からマルク諸島やバンダ諸島へ最短で向かえるスラウェシ島の東側を航海

するルートと比べて、迂回する形となる同島西側を通るルートの重要性は圧倒的に低かったと考えられる²⁰。こうしたことから、当時において当該の各地図にセレベスとして現れる場所に重要な港市や町が存在した可能性は極めて低いとせざるを得ない。[図3]を見ると分かるが、同図をはじめ多くの地図では島としてのセレベスの名を[図1, 2]の位置に記している。この点を考えると、本来島全体を指すべきセレベスの名が何らかの問題で誤って港市・町を指してしまい、それが現在に至るまで伝わってしまったのではないだろうか。以上のことから、港市・町の名前としてのセレベスは、削除されるべきである。

削除したほうが良いと思われるもう1つの地名は、ゲラムである。島であるこの地は現在も<Gelang>とこの名が通用する一方、管見の限りVOC文書においてはその名前を確認することはできない。当該の地図ではこの島が中国の元代における華僑活動地として掲載されていることを考えると、朱印船貿易が展開した時代には重要性を失っていた可能性が高い。この点を考えると、この島についても削除が適当ではないかとみられる。

チモールは、オランダ東インド会社文書でTimorとされこれを日本語読みにしたものとみられるが、近年ではティモールの呼称が使用されることが多く、インドネシア史では後者を用いることが一般的となっている。これらを考えると該当の地名は、島であることも考慮してティモール島とすることが適当といえる²¹。加えて、もう1点修正が必要な点を挙げたい。[図2]では、現在の東ティモール民主共和国の首都であるディリ<Dili>の位置に港市名ないし町の名として「チモール」が現れる。しかし、港市ないし町としてこの名を挙げる場合には、時代や影響下に置いた宗主国との関係から、少なくとも3つの候補が存在する。現在の東ティモールにあたるポルトガル領ティモールでは、1702年に最初に拠点を置いた現在のインドネシア領西ティモールにある東ティモールの飛び地オイクシ<Oecusse>にあるリファウ<Lifau>と上述したディリがこれにあたり、現在の西ティモールとなるオランダ領ティモールでは17世紀にVOCが拠点を置いた同島西端のクパンがその候補となる。17世紀にティモール島で活動しポルトガルより早く拠点を築いたオランダの史料の記述に基づけば、港市・町としての「チモール」はディリではなくクパン<Kupang>を指す可能性が非常に高い。だが、当該の図は元代の華僑活動地を示すため、三者のどれがこれに該当するかは不明であり、港市・町として示すことは危険であると思われる。こうしたことから、ティモール（チモール）については港市や町の名ではなく、[図3]のように島全体の名称として示すほうがふさわしいと考えられる。

スマトラ島南東部のトゥルクブトゥン<Telukbetung>は、その後当地と川を挟んで隣接するタンジュンカララン<Tanjungkarang>と合併してタンジュンカララン・トゥルクブトゥン<Tanjungkarang-Telukbetung>となり、さらにバンドルランブン<Bandar Lampung>と改名して現在に至る土地である。当地を含むランボン<Lampung>地方²²は、17世紀には胡椒の生産地として非常に重要な役割を果たしていた。しかしVOC文書にはランボンの名称のみが現れ、管見の限りトゥルクブトゥンの名を確認することはできない。オランダ東インド

会社文書では、ランボンに関して当地とジャカルタ・バタヴィアとの間を航行する船舶の記事が散見されることから、トゥルクブトゥンがランボンの港であった可能性はある。だが、他の港がランボンの港であった可能性も否定できない。加えて、インドネシア史ではランボンが港市・町ではなくより広範な地域・地方を示す名称として用いられている現状もある。こうしたことから、トゥルクブトゥンについては港の具体的な位置を示さず、ランボン地方と広域の名称を提示することが最もふさわしいのではないかと著者は考える。

V.

この節では、特に日本史研究をはじめとする歴史研究をもとにした歴史教科書における地図の記述を取り上げて、修正が必要な点を指摘したい。

〔図4～6〕の地図では、インドネシアやその周辺各地域が挙げられ、どの地域をどのヨーロッパ勢力が影響下に置いていたかが示されている。しかしながら、地図の一部地域を色違いで塗りつぶして「スペイン領」「ポルトガル領」「オランダ領」と提示する方法は、当該地域をそれぞれの勢力が領域支配していたことを連想させるため、極めて重大な問題がある。加えて〔図4〕では、ボルネオ島／カリマンタン島について、北部をスペイン領、南部をポルトガル領とする完全な誤りが見られ、〔図5, 6〕でも同島の北部がスペイン領とされる誤りが存在する。スペインやポルトガルがボルネオ島／カリマンタン島において領域支配はおろか拠点となる港市・町の支配も行った事実は、皆無である。どのような経緯で上記のようになったのか不明であるが、同島についてはポルトガル領やスペイン領は存在しなかったと修正されるべきである。

またオランダについても、最終的にはカリマンタン島南部を植民地にするものの、17・18世紀には各拠点の支配もまだ行うことができていない。インドネシアとなる地域においてオランダが最も早く領域支配を行うのは、中・東部ジャワで展開した華人反乱〔1740－1743年〕鎮圧において大きな役割を果たしたVOCが、当時この地域を支配下に置いていたマタラム王国からジャワ北岸地域を割譲される1743年であり、その他の地域について19世紀になるまでオランダは領域支配を行うことはできなかった。日本史では「支配＝領域支配」の図式が一般的であるために、こうした地図の描写がなされたのかもしれない。しかしインドネシア史をはじめ島嶼部東南アジア史では、近世末期になるまでこの図式は成立せず、「支配＝拠点支配」であった。このため、領域支配を想起させる〔図4, 5〕における支配の提示の仕方は、朱印船時代を扱うものとしての正確性を著しく欠いてしまっている。また「17～18世紀の東南アジア」とする〔図6〕も、18世紀後半のジャワ北岸については多少の正確性を持つ一方、17世紀やジャワ北岸以外の地域については、上述したスペイン領の誤りとともに大きな問題があると言わざるを得ない。

インドネシアではないが、教科書の地図における記述の問題について、もう1点著者は指

摘しておきたい。[図7]では、インドネシアに隣接するマレー半島がマライと記されている。これはオランダ語はじめヨーロッパ語のMalayをローマ字読みしたもので、「馬來（半島）」とも書かれたように第二次世界大戦までの日本ではごく一般的な呼び名であった。だが大戦後に同半島を含めて独立した国がマレーシアであるように、現在はマレーという呼称が一般的なものとして完全に定着している。この点や半島であることを踏まえれば、当該の地名はマレー半島とするのが極めて妥当ではないだろうか。

VI.

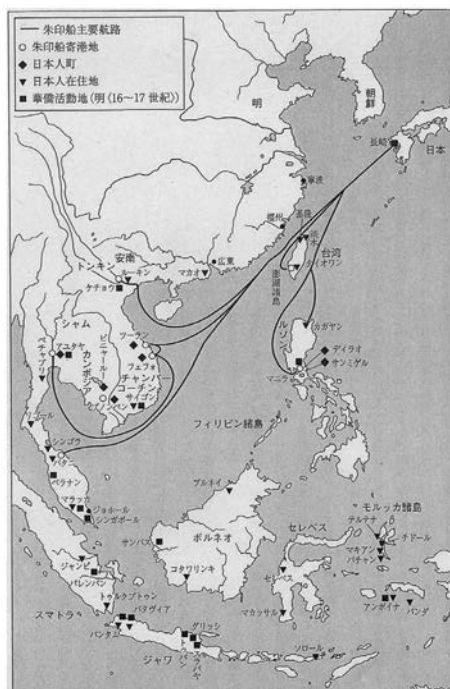
以上、朱印船貿易時代に関連する日本史研究とそれを反映した歴史教科書におけるインドネシアと一部周辺地域の表記や位置などについて修正を行った。修正を行った結果は[図8]に示した通りとなる。

本稿で指摘した地図上の呼称や描写における諸問題が生じた要因を考えると、日本史研究者とインドネシア史研究者との間で地名などを巡る議論がこれまであまり活発に行われてこなかったことが、最も大きいのではないだろうか。前節の描写の問題で提示したような支配に対する両者の認識の違いは、その最たるものだろう。また地名についても、独立以降現在に至るまで共和国政府が積極的に地名の変更を行ってきたインドネシアの場合、他の東南アジア諸国以上に以前のものと相違が顕著であるため、問題はより大きいように思われる²³。もっとも地名表記の仕方については、本稿におけるいくつかの注で示したように、インドネシア史研究者の間でも若干の揺れが生じている現状があることも考えなければならない。

こうした状況を変えるには、関係する各地域の歴史研究者同士が地図に関して表記や描写について議論を行うことが非常に重要であると思われる。本稿がその契機の一つとなれば、幸いである。

- 1 池端雪浦（編）（1999）『東南アジア史Ⅱ 島嶼部』（世界各国史6）山川出版社。当該書のインドネシア部分は、深見純生、弘末雅士、鈴木恒之が執筆している。
- 2 行武和博（2003）「異国窓口の景観と機能—平戸・出島・唐人屋敷・釜山倭館 1—平戸オランダ商館」 荒野泰典 編『江戸幕府と東アジア』（日本の時代史14）吉川弘文館 pp. 317-362.
- 3 蓮田隆志（2015）「朱印船貿易・日本町関連書籍所載地図ベトナム部分の表記について」『資料学研究12』 pp.33-53.
- 4 なお歴史教科書のうち1点は高校世界史教科書も挙げている。高校歴史教科書でも呼称や描写の相違や誤りが見られるからである。
- 5 本稿では、当該時期のオランダ語史料としてNationale Archief, The Hague. Archief van de VOC. (1.04.02) *Overgekomen Brieven en Papieren., Bataviaasche Uitgaande Brieven.*; Coolhaas, W. Ph. (ed.) (1960-) *Generale Missiven van Gouverneurs-generaal en Raden aan Heren XVII der Verenigde Oostindische*

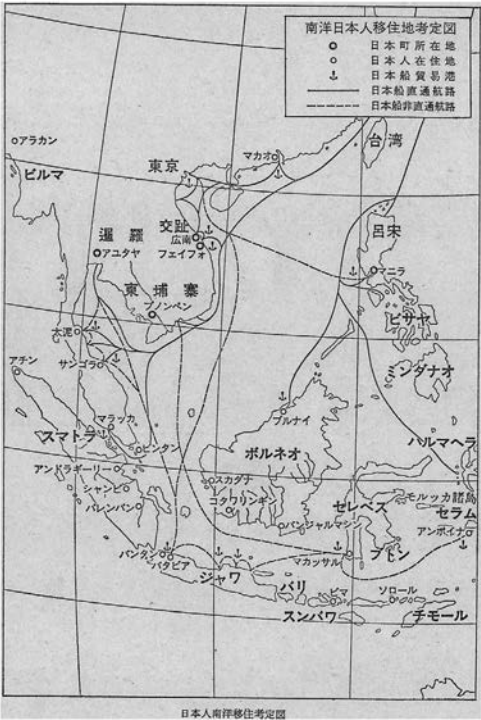
- Compagnie*. 13 vols. The Hague: Martinus Nijhoff; Colenbrander, H. T. and Coolhaas, W. Ph. (eds.) (1919–1953) *Jan Pietersz. Coen: Bescheiden omtrent zijn Bedrijf in Indie. Uitgegeven door het Koninklijk Inst. voor de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indie*. 7 vols. The Hague: Martinus Nijhoff; Department van Kolonien (1887–1931) *Dagh-register; Gehouden int Casteel Batavia vant Passerende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlands-India*. 31 vols. The Hague: Martinus Nijhoff; Jonge, J. K. J. de (ed.) (1862–1888) *De Opkomst van het Nederlandsh Gezag in Oost-Indie*. 13 vols. The Hague: Martinus Nijhoff. のオランダ東インド会社文書を利用する。なお、本文で用いるオランダ語の地名は、朱印船貿易が活発に展開した時期について特に言及する *Jan Pietersz. Coen* の索引、また当該文献にないスンパワについては *Dagh-register, Anno 1624–1629* の索引からそれぞれ引いている。
- 16 なおブトンについては近年ブトゥンの呼び名も使われている。
- 17 ただ、小スンダ列島にある同島は、小島でかつ周辺にも島々が存在するため、その位置を正確に比定することが難しいという事情はある。
- 18 図2ではローマ字でBORNEOと記される。
- 19 その点では、[図4]のように地名と占領年、占領した国を示す方法は、一考に値する。
- 10 シンガプーラと表記するものも散見される。
- 11 *Jan Pietersz. Coen* の索引では前者が挙げられるが、本文では後者の呼称も頻繁に現れる。
- 12 *Jan Pietersz. Coen* の索引はIndragiriで挙げられるが、他のVOC文書ではしばしばAndragiriの名も現れる。
- 13 当該の地名は、オランダ語読みではグリッセとなる。英語読みにするとグリッシになるため、この英語読みが日本語の表記として定着した可能性もある。
- 14 なお当地についてインドネシア史では、グルシクの呼び方も使われている。
- 15 オランダ語では主として複数形を“-en”と表すため、モルッカ<Molukka>の複数形であるMolukkenは、モルッカ諸島となる。
- 16 [図4, 5]はセレベスが島の名前として掲載される一方、当該の場所に日本人所在地・日本人在住地の印が打たれている。
- 17 Paulus, J., et al. (ed.) (1917–1940) *Encyclopædie van Nederlandsch-Indië; met medewerking van verschillende geleerden ambtenaren en officieren*. 2nd ed., 8 vols., 's-Gravenhage : Martinus Nijhoff ; Leiden : E. J. Brill.
- 18 *Encyclopædie van Nederlandsch-Indië*. Deel 3, N-Soema, (1919) p. 274.
- 19 *Encyclopædie van Nederlandsch-Indië*. Deel 1, A-G, (1917) pp. 464, 634–635.
- 20 また当該地域周辺の海域が、スルー海に近接する海上民の活動が活発な海域であり、貿易船が航行するにはかなりの危険が伴ったことも、当時船舶がこの海域を敬遠する一因となったと考えられる。
- 21 但し、当地を扱った学術研究や報道などにおいて一部現在もチモール島の呼び名も存在する。
- 22 但し現地語に近い読みとして「ランブン」とするものも多い。
- 23 朱印船貿易とは関係しないが、近年積極的に政府が地名の変更を進めるミャンマーも、インドネシアに近い状況にあると思われる。



〔図 1〕 木村直樹「近世の対外関係」 p.119より



〔図 2〕『週刊朝日百科日本の歴史31』 p.269より



〔図3〕 岩生成一『続 南洋日本町の研究』（岩波書店、1987年）附図より



①朱印船の航路と日本町

〔図4〕 2013東書『新選日本史B』 p.119より



③ 朱印船の航路と日本町の分布

【図 5】 2015 日本文教出版『中学社会 歴史的分野』 p.116より

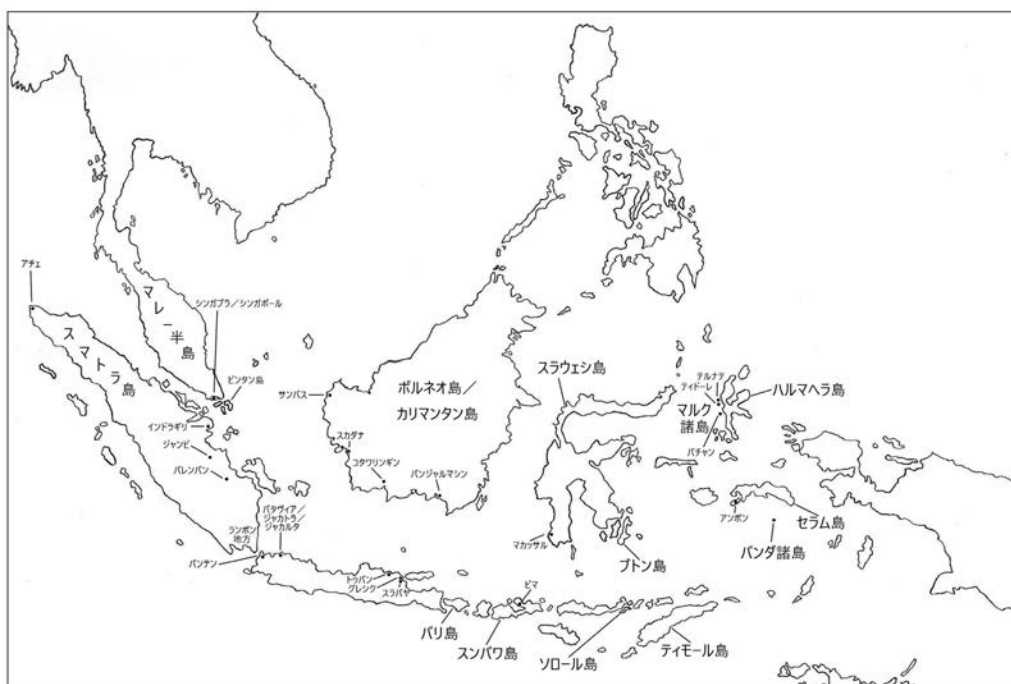


《②17～18世紀の東南アジア》ポルトガルやスペイン、オランダといったヨーロッパ勢力ばかりでなく、中国の福建などからやってきた華僑が各地に展開した。

【図 6】 2015 帝国書院『新詳世界史B』 p.131より



〔図7〕 実教出版2015『日本史B』 p.163より



〔図8〕 インドネシア・周辺地域地図（修正後）